

踊る大漕査線

国体六連覇の軌跡・奇跡

- 第59回（2004） 彩の国埼玉国体
- 第60回（2005） 晴れの国おかやま国体
- 第61回（2006） のじぎく兵庫国体
- 第62回（2007） 秋田わか杉国体
- 第63回（2008） チャレンジ！おおいた国体
- 第64回（2009） トキめき新潟国体

関西高校ボート部

『 We did not give up. At last we are Achievers. 』

ついに国体制覇です。この日をどれだけ待っていたことか・・・。関西 TEAM は、過去センバツ3回、インハイ1回、全日本 Jr. 1回の計5回（朝日 R を合わせると7回）の全国優勝の栄を GET してきました。しかし、国体だけはどうしても優勝できませんでした。（過去に入賞は数回ありますが・・・）私の努力不足なのか？単独チームの壁なのか？集中力の欠如なのか？とずっと悩んできました。が、今回努力の甲斐あって初の国体制覇の偉業を成し得ることが出来ました。

昨日、11時50分 レース No.139 少年男子舵手付きクォドルプル決勝、今年こそはと思い『捲土重来』の T シャツを着てスタート付近を自転車でウロウロしていました。今日は黙っておこうと思ったのですが・・・知らず知らずにいつものように？紺メガホンを持って叫んでいました。「関西、思いきれえ～～！その為にリラックスや！」と叫んだのですが、前日からの大声の出し過ぎで喉が枯れてしまい彼らには聞えなかったようです。（これがヨカッタのかも??）レースの方は、前半全クルー競っていましたが、途中から静岡選抜と一騎打ちとなり、600mで半艇身出て700で一艇身飛び出して、そしてラストはいつもの Fire Spurt で静岡に一艇身半の水を開けてのゴール。完勝でした。ゴールした瞬間、雄叫びを上げながらガッツポーズをして艇の上に立つ選手を見て涙が止まりませんで

した。まさに・・・その時、歴史が動いたのです。私は、陸で大声を上げてガッツポーズをして狂っていました。何人と握手したでしょう？何人の OB と抱き合ったでしょう？優勝した場所がボートのメッカ、埼玉戸田オリンピックコースです。そこには現在20数名のOB、私の教え子たちがいます。その教え子の目の前で旭川の雑草集団が『日本一』を達成してくれたのです。これほど嬉しいことはありません。OB たちも後輩たちの勇姿を見て感動して涙して喜んでくれました。

表彰式後、またまた選手達に『日本一の胴上げ』をして頂きました。本当に有り難いことです。（ピンクのお洒落な？ブリーフパンツが露わになったけど・・・。誰やねん？私のジャージをずらしたんは??）

最後にここで引退していく選手たちに言いたいです。「私は、このチームを率いることが出来て幸せ者です。沢山の感動を頂きありがとうございました。どうかこれからも関西 TEAM を見守って下さい。

2005 第60回 晴れの国おかやま国体 『思えば叶う 夢実現』

森川幸夫

岡山国体が終わって早や一週間が経ちました。OB・父兄そして関西ファンの皆様、本当に、本当にありがとうございました。皆様のお陰で少年男子の種目において2種目制覇（ダブル・クォド）、更には少年男子総合第1位の偉業を達成することが出来ました。この少年男子の部で2種目制覇というのは、H9（大阪国体）に福井県が成し得てますが、“単独チーム”が2種目制覇するというのは史上初のことだと思います。本当に嬉しく思います。支えてくれた全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。9月13日（火）午前11時10分のダブルの島根選抜（高校 JAPAN）を抑えてのブッチぎりのレース、続いて11時50分のクォドの歓喜のゴール。私は、百間川の土手の上で涙しながら何度もガッツポーズをして叫んでいました。過去に数回『日本一』を GET して涙したことはありますが、今回は違っていました。いろんな想いが私の中で大爆発しました。

この4、5年間、岡山国体前ということで私には正月以外ほとんど休みというものはありませんでした。（正月も OB 会が・・・）常々、何でもここまでしなければならないのか？国体なんて来なければいいのに？！練習会・合宿なんて無ければいいのに！俺のペースじゃない！！といったネガティブなことばかり頭の中で思っていました。また、毎年9月の国体で引退していく3年生を羨ましく思い、「俺も引退したい！自分には終わりはないのか？あ～～～逃げたい！！」とさえ思っていました。しかし、数日後には次なる目標を持って『必殺仕事人』となって熱く生徒に語っている自分自身をおかしくも悲しく感じたこともありました。

昨年、埼玉で念願の初優勝をした時、その時点でかなりのプレッシャーを感じていました。埼玉国体の閉会式で会場のスクリーンに『来年は岡山で会いましょう』と映し出された時、なぜか私の脚は震えていました。マスコミには「この結果が来年の岡山と逆であつたらいいのに・・・。」と情けない事を言ったのを覚えています。2連覇できるのか？というプレッシャー以外に、次の新しいメンバーで、それも地元『岡山』の地で大声援の中で県民の期待に応えられるだろうか？という二重のプレッシャーが掛かっていました。だから、昨秋の国体後にそういったことから来るストレス・心身の疲労でメニエルになって入院したのかもしれませんが。ボート部には顧問が私一人だけで誰にも悩みを打ち明けられませんでした。

今回の国体は、私にとって「大バクチ」でした。多分、誰もがあのメンバー構成を見た時、聞いた時驚いたと思います。優勝した春の選抜・朝日 R、準優勝した夏のインハイのメンバー構成と全く違うのです。本校には、今年の高校日本代表および代表候補が4名いました。

当初は、この4名をクオドで揃えたらきっと勝てるだろうという計算がありました。多数の人がそう思っていたのではないのでしょうか？しかし、国体は『優勝』することも目的ですが、天皇杯獲得のため得点を獲ることも目的なのです。それにダブルもシングルも『岡山選抜』なのです。岡山選抜であるゆえ恥ずかしいことは出来ない。全てNo.1とOnly Oneを狙う！そして皆をHEROにさせたい！！既存の殻を破り、練習からワクワク・・・ドキドキ・・・した新しい挑戦をし、『**NEW KANZEI TEAM**』を創ろうと心に決めました。

(しかし、心のどこかで・・・勝てば永遠のスーパーヒーロー、負ければ大アホにされる？！とっていたことも事実です。)

国体会場である百間川には、連日大勢の人々が観戦に来られていました。特に目立ったのが、700m付近の関西サポーターの集団でした。多い時で約400名の関西サポーターが応援に来られていたと思います。それ以外に地元の人々、操南中学校の1年生全クラス、大安寺西町内会(シングルの応援)、関西高校の校長・副校長・教頭・先生、私の家族・両親までもが応援に駆けつけていました。また、陸上スタッフとしてボート協会をはじめ沢山のボート部OB・大学生・高校生が、役員や補助員として朝早くから夜遅くまで大会運営で働いてくれていました。そういった方々に対して感謝の気持ちでいっぱい・・・『結果＝感動』でお返ししたいと思っていました。

決勝の前夜、私はミーティングの時、それまでのいろんな苦勞が思い出されて、選手の前で感極まって泣いてしまいました。多分、試合前日のミーティングで泣いてしまったのは初めてだったのではないのでしょうか？いつものように翌日のタイムテーブルを説明したその後、・・・「いよいよ明日は、ラストレース。勝敗なんてどうでもええ～。スピードだけを求めて思い切ってやれ！計算したらあかん！！」と言った瞬間、目から涙が溢れ出てきました。「明日言うことかもしれんけど・・・おめえら、ほんまにええチームやった！特に3年生、よくここまで頑張った！苦しかったろう？辛かったろう？昨年よりもずっと厳しい練習を課してきた。無茶なこともしてきた。俺も分かっていた。いや、俺以上におめえらが感じていたはずや？！許せ！！でも、ほんまによく辛抱して付いてきてくれた。ありがとう。」と・・・。その後はもう言葉になりませんでした。(今から思えば恥ずかしいような・・・)

決勝の歓喜のゴールの瞬間、以上のことが私の頭の中で大爆発したのです。決勝のゴール後、関西の校歌を泣きながら歌い、船台に戻ってきた選手を私は一人一人抱きしめていました。そして部員全員で人差し指を高らかに上げて「いちば～～～ん！」と勝利の雄叫びをあげました。その後、私は部員全員に持ち上げられて船台から百間川に放り込ま

れました。同時に選手たちも次々と自ら百間川に・・・ドボ～～ンしました。まさに日本一のスーパーダイブでした。(実は・・・私は部員に川へ放り込まれた時、少し百間川の名水？を飲んでしまいました。体に触れた百間川の水はなんだかヌルヌルしていたような・・・??)

昨年の埼玉国体では戸田で頑張っている二十数名の教え子の前で、今年は関西 TEAM を支えてくれた現役部員・OB・父兄・OB 父兄・関西ファンの前で『日本一』を達成し、『日本一の感動』を共有できたことを心より嬉しく思います。

最後に・・・**We did not give up. We are Achievers in 2005.**

私は本当に幸せ者です。ありがとうございました。

2005 (平成17年) 9月 吉日

2006 第61回 のじぎく兵庫国体 思えば叶った! 三連覇達成!!

森川幸夫

今回の『のじぎく兵庫国体』では、支援して頂いた皆様のおかげで男子クォドルプルの部において見事優勝し、前人未到の三連覇を達成することが出来ました。また、ダブルスカルで第6位入賞、シングルスカルで第3位入賞（過去最高）し、3年連続でブッチぎりの《少年男子総合第1位》となりました。心より感謝申し上げます。

この一年間は、本当に苦しいものでした。（練習以外でいろいろあったし・・・?!）一昨年の埼玉大会、昨年の岡山大会、そして今年の兵庫大会と一回目の優勝よりも二回目、二回目よりも三回目と周りからのプレッシャーと私の心の中のハードルが年々高くなっていきました。三連覇というのは、言うのは簡単かもしれませんが、毎年選手が入れ替わる中、やり方を変え挑戦し続けなければなりません。さらに本校には、ボートがしたくて入学してきた生徒は殆どいません。（殆どが拉致?された生徒ばかり。笑）いかに彼らの心に火を点けるかが問題となりました。この苦しさは言い難く、おそらく部員と私しか分からないと思います。勝ち続けることの難しさ、挑戦し続けることの苦しさを実感した一年でした。本当に選手たちはよく耐えてくれました。敬意を表したいと思います。

今年度より国体が10月開催となりました。今までは、ボート競技は夏季大会で9月上旬に行われていましたが、今年度より夏季・秋季が一緒になり10月開催となりました。つまり国体開催が例年より約一カ月遅れとなり8月のインハイから二カ月ものインターバルがありました。関西 TEAM においては・・・インハイの結果に満足したのか?3年生にとって引退が伸びてガッカリしたのか?8月下旬～9月上旬は、はっきり言って部員の集中力も飛んでいたように思われました。だから、8月下旬にトレーニング合宿を入れたりして目先を変えていったのです。異例の国体の会場地である城崎で現地合宿もしました。しかし、その後もなかなか集中できず、妥協が妥協を呼んで危機感・使命感も欠如していったようでした。そういったことからクルー編成もあえて決めませんでした。（主将の若山とは毎日のように練習終了後二人でチーム・クルーの状態を相談していました。若山、相談にのってくれてありがとう。）そして、最終的に国体クルーが決まったのは、大会出発10日前の9月17日（台風襲来の日）だったと思います。それから愛媛合宿に行くなど一気にクルーを仕上げていきました。選手の皆も全く休みがなく苦しかったと思いますが、よくここで目が覚めてくれました。（運転していた私が一番苦しかったかも?!）

新クルーで臨んだ兵庫国体。10月1日の予選は多少硬さがあつたものの全クルー1位で通過。2日は、敗復のためOFF。城崎マリンワールドに行ったり、出石そばを食べたりと・・・Refresh Day?としました。翌3日の準決勝レース、これはまさに九死に一生を得たと言っても過言で

はないでしょう。レース No. 102、14時50分発のレースでした。なんと、関西艇がウォームアップ中に破損したのです。レース直前であるにもかかわらず、関西艇がコース横の600m付近で停まって水上でゴソゴソしているのです。陸で彼らのウォームアップを見ていた私は、とっさに「ヤバい！故障や！！」と気付きました。その時の時刻は、なんと14時42分でした。（この時刻は忘れられません！）すぐにトランシーバーで陸にいるサポート部員に呼びかけ、棧橋に行くよう指示しました。私も自転車で田んぼの中をブツ飛ばして必要な工具と交換部品を持って棧橋へ駆けつけました。艇の故障のことを審判に申告し、レースの発艇を10分遅らせることになりましたが、神業？の如く修理してスタートに向かわせました。この事態に選手は動揺していましたが（一番動揺していたのは実は・・・私！）、私の魔法？のおかげでよく切り替えてくれました。レースは、途中までインハイ王者の熊本学園と競り合っていましたが、終盤で引き離し1位でゴール。なんとか決勝進出を決めました。（レース前に、こんなトラブルがあれば普通なら勝てません?!）その時、私は「きっとこれは神様が勝たせてくれたんや！“関西はこんなところで負けたらあかん！！”と言ってくれているんや。」と思いました。

その夜のミーティング。部員たちに一年間の労をねぎらった瞬間、涙が溢れてきました。「おめえら、ここまでよう頑張った！ありがとう。」と・・・そして、翌4日の決勝、出艇前に彼らに「いよいよラストレース。思いっきり楽しんでこい！」と指示しただけで他は何も言いませんでした。その後、棧橋を蹴り出し少し沖に行ったところで関西クルーが、いきなり自発的に大声で校歌を歌い始めたのです。私は、この瞬間、『勝利』を確信しました。“これは・・・イケる！！”と。11時50分の決勝レース、静岡選抜との息が詰まるような大接戦の末、1秒差でゴール。ついに・・・単独チームで前人未到の三連覇を成し得ることが出来ました。これで18回目の『日本一』です。

最後に・・・支援して頂いた関係各位の皆様、本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。今後共、関西ボート部をよろしく申し上げます。

やっぱり・・・今年も・・・**We did not give up. We are Achievers in**

2006. Believing is the best driving force.（信は力なり）

2006年（平成18年）10月 吉日

2007 第62回 秋田わか杉国体 感動させる人間 感動する人間

森川幸夫

秋田国体から早いもので約一カ月経ちました。いろいろな方々のおかげで前人未到の単独チームによる国体四連覇を達成することが出来ました。選手たちは、毎年部員が入れ替わる中、本当によく頑張りました。新チームになってから一度も全国優勝していないのに、大会前から周りより四連覇と騒がれ、そのプレッシャーに見事に打ち勝ったのです。そして、私にとって20回目の『日本一』をプレゼントしてくれました。本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。国体で優勝した直後、今回は絶対に泣かない！と思っていましたが、マスコミからのインタビューを受けている時、急に今までの苦しさ・悔しさが思い出されたのか？一気に涙がこみ上げてきて言葉になりませんでした。ただ・・・「ありがとう」だけしか言えませんでした。（これがテレビで放映されたなんて・・・恥しい！）

このチームは、新チーム結成からなかなか勝てませんでした。いや、勝たせてやる事が出来ませんでした。3月のセンバツ大会《静岡》では荒天のため大会自体が中止、5月の朝日レガッタ《滋賀》では“ザマーミロ！”と言われた準優勝、8月のインハイ《佐賀》では世界 Jr. 大会に2名の選手を輩出し主力抜きでのギリギリの？第6位入賞。だからこの国体は、私にとっても、選手たちにとってもラストチャンスでした。8月の中旬過ぎに大体のクルー構成を決め、8月の終わりの県主催の合同合宿《熊本》で『死ぬほど努力した者が目覚める』といった勝利者の覚醒というものを学びました。では、何をしてきたか？具体的に言えば沢山あってキ

りはありませんが、私は・・・未常識（非常識ではない）の中からチャンスが生まれる、常識の中だと範囲が狭くなって劣化してしまう・・・と考えたのです。選手たちは、自ら進んで苦しい練習をしていきました。と同時に選手同士が分からないこと、出来ないことをお互い教え合うなどして何かしら素直になっていきました。もちろんチームもどんどん進化していきました。

そして、迎えた秋田国体。チームタイトルを『感動させる人間、感動する人間』として大会に臨みました。団体種目のクォドルプルは予選・準決と全体のトップタイムで通過しましたが、ダブルスカルは予選を通過したものの準決勝で惜しくも敗退（ベスト16）しました。決勝前日の夜のミーティング、準決で惜敗した森本主将（ダブルスカル・整調）の三年間の苦労と努力をねぎらいつつ、私は皆の前でこう言いました。「明日、キャプテンはレースに出ないけど、このチームの主将は森本じゃないとだめだったんだ！明日、森本を日本一の主将にしてやってくれ！おめえら、頼んだぞ！！」他の皆は黙って頷いてくれました。

また、もうひとつ忘れてならないことがあります。それは、宿舎です。今回は、いつもと違い『民泊』でした。つまりホームステイです。私は、過去5、6回インハイ・国体で民泊の経験はありますが、生徒たちにとっては初めての体験です。それも3軒に分かれての8日間にわたるホームステイでした。入宿当初は、宿泊家庭に対し、きちんと挨拶できるだろうか？粗相をしないだろうか？とか心配していましたが、それも杞憂でした。（一番粗相をしたのは・・・私かも?!笑）反対に心温まるもてなしを受け、時に選手たちはそれぞれの家庭でその家の息子、あるいは孫のようになっていました。だから、その厚意に対して感謝の意を表すために、どうしても勝ちたかったのです。優勝して、私たちがお世話になっている民泊を『No.1&日本一』の民泊家庭にしたかったのです。国体が終わった今でもお世話になった家族の皆さんの顔が思い出され、感謝の気持ちでいっぱいです。

いよいよ決勝。レース前のウォーミングアップ、リギング（艇の調整）の時、私は彼らのリラックスした表情の中に秘めた闘志を感じて・・・“絶対に勝てる”と思いました。レースは、スタートで宿敵福井に出られましたが、400mで並び、そこから競り合い、650mで一気に差し切り、最後は水を開けてのゴール。ブッチぎりのレースでした。選手たちは、ついに『感

動させる人間、感動する人間』になったのです。今年も・・・We did not give up.

We are Achievers in 2007. でした。

四連覇を達成した今、もう周りから五連覇と言われますが、私はまだそんなことは考えていません、考えられません。新チームの見通しをもっとはっきりさせたいのです。それに・・・自分自身が苦しくなるからです。ただ、これからも熱い感動を求めていきます。どうか、今後ともご支援・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願いします。

最後に選手たちに一言 『人は望むところまで強くなれる』

Impossible is nothing.

2007年（平成19年） 10月 吉日

2008 第63回 チャレンジ!おおいた国民体育大会 五連覇達成 道は開ける
森川幸夫

ついにやりました。皆様方の熱いご支援・応援のおかげで念願の国体五連覇・史上初の年間グランドスラム四冠（選抜・朝日 R・インハイ・国体）を達成しました。それも他県が選抜クルーで挑んでくる中、関西高校の単独クルーで達成出来たのです。これほど嬉しいことはありません。心より御礼申し上げます。

今夏のインハイで団体として11年ぶりの優勝（11年前は舵付きフォアで優勝、クォドルプルでは初、ダブルスカルでは2年前に優勝）を為し得た後、いかに選手たちのモチベーションを上げるか？が最大の問題でした。過去4年間の国体優勝は、いずれもインハイの惜敗の悔しさを国体にぶつけて、その懸命な努力の結果、勝ち得てきました。また、私には11年前の国体（H9大阪なみはや国体）の苦い思い出があります。今年同様、選抜・朝日 R・インハイと優勝しましたが、最後の国体で3位という結果で終わってしまいました。この敗因は、選手のモチベーションを上げてやれなかった私の責任だと今でも痛感しております。だから、同じ失敗は繰り返したくないと思い、選手たちのモチベーションを上げるのに必死でした。インハイ以降は、モチベーションとの戦いであったかもしれません。しかし、案の定？選手のモチベーションは下がってきました。人間のすることです。無理もありません。例えば、本当に欲しかったアイスクリーム（全国優勝）をやっとの思いで食べた後、次のアイスクリームを欲しがるのでしょうか？だから、一旦クルーをバラバラにし、数回の県外合宿、アドバイザーコーチ指導、ゆる体操、メンタルトレーニング等あらゆる事を実施し、選手たちに「危機感」を持たせてきました。危機感がなければ妥協が生まれ、衰退が始まると感じたからです。そして、選手の心の中に、それまでの選抜・朝日 R・インハイの栄光は全て無かった事とし、国体制覇こそが「本物」であり、真の「王者」であると植え付けてきました。

また、私にはどうしても勝ちたい！何が何でも勝ちたい！！という理由がありました。国体出発の2日前（9月27日）、私の父が大怪我をし緊急入院したのです。そして、手術の日が国体出発日（29日）と重なったのです。そんな中、入院中の父が、手術に立ち会えない私を気遣ってか？私に泣きながら「頑張ってくえ～よお～！エエ報告待つとるから・・・。」と言ってくれたのです。その時、私は、絶対に勝って父に「元気」を送りたいと心に誓いました。

そして、国体本番。全ての県が『打倒岡山、打倒関西』と挑んでくると考え、チームタイトルを『Ultimate Crush』（撃破）とし大会に臨みました。初日の予選、3日目の準決勝（2日目は敗復のためレースなし）と何とか1位で勝ち上がり決勝を迎えました。（予選が一番

危なかったような・・・?!でも、これで目が覚めました!)

決勝前日のミーティングで私は部員たちにこう言いました。「おまえら3年間よう頑張った。わがままな俺によう辛抱して付いてきてくれた。おめえらから感動をいっぱい頂いた。ありがとう。明日は、いよいよこのチームのラストレース。思いっきり楽しめ!ただ・・・逃げることだけはするな!!」と・・・。

決勝は、福井・岡山・宮城・兵庫の4配レースでした。レースは、関西艇がスタートから飛び出し、500m付近で他艇に約一艇身リードを保っていました。450mのコース上の橋の上から私は「関西、行けええ～～!もっと離せええ～～!!」と叫んでいました。が、650mあたりから福井にジリジリと差を詰められ800m付近で完全に並ばれてしまいました。そこから一漕ごとにトップボールが入れ替わる一騎打ちとなりました。もちろん私の声など届きません。橋の上からただただ祈るだけでした。橋の上から見る限り、二艇が同時にゴールし、どっちが勝ったのか全く解りませんでした。無線機でゴール付近の陸にいる部員にどっちが勝ったのか?を尋ねても全然応答がありません。その数秒後に・・・「1位 3レーン 岡山県 タイム・・・」と結果が会場アナウンスされました。

それを聞いた瞬間、目から熱いものがこみ上げ、橋の上で「やったあ～～～!!勝

ったぞおおお～～～!!」と叫びながら両手を揚げてガッツポーズをしています

た。わずか・・・0.12秒差で勝ったのです。後から知人に聞くと990mまで負けていて最後の一漕で勝ったと・・・?!この勝利は、ミラクルとしか言いようがありません。最後の最後に、神様が関西艇を押ししてくれたのだと確信しています。勝利の女神は関西に微笑んでくれました。私を愛してくれました?!笑

表彰式、壇上で1位～8位までが表彰されますが、1位だけが表彰状を読んでもらえます。国体であるため通常は県名しか呼ばれません。しかし、賞状を受け取るうちの選手に対し

「1位、岡山、関西、五連勝!」と言ってくれたのです。受け取った選手も壇

上から観客の方を振り向き、賞状を高々と突き上げ、「それは・・・関西ですか

ら!!」と叫んでいました。私は、笑いながら感動していました!また、その後、日本ボート協会理事長が大会の講評で、開催県の大分の活躍よりも先に「毎年、選手が入れ替わる中、国体五連覇を達成した岡山関西を賞賛したい。」と述べられました。その途端、会場の観衆から拍手が沸き起こり、観客席の中央にいた私は思わず席から立ち上がり両手を上げて周りにガッツポーズをしてしまいました。その時、私の五年間、いや二十年間の苦労が全て報われた気持ちになり胸が熱くなりました。同時に過去四年間の国体優勝シー

が次々と脳裏に浮かんできました。

国体五連覇を達成した今、支えてくれた方々に対し、感謝の気持ちでいっぱいです。私は、本当に幸せ者です。部員の皆、保護者の皆様、ありがとうございました。

We are Achievers in 2008. 『思えば叶う。そして・・・道は開ける。』

2009 第64回 トキめき新潟国体 夢の・・・6連覇達成！！

森川幸夫（ボート少年男子監督・関西高等学校）

ついにやりました。激しくトキめきました。学校・ボート協会・保護者の皆様をはじめいろいろな方々のおかげで新潟国体優勝です。夢の・・・6連覇達成です！！熱い応援ありがとうございました。

2004年の埼玉国体で初優勝し、05岡山、06兵庫、07秋田、08大分、そして2009年新潟国体と6年連続少年男子舵手付きクォドルプルの部（団体）で優勝の栄を収めてきました。選手が毎年入れ替わる中、誰がここまで勝ち続けると想像したでしょうか？もうこの記録は破られないのでは？とさえ思ってしまう。これは、選手たちのひたむきな努力と支援して下さったいろいろな方々のおかげであると確信しております。感謝の気持ちでいっぱいです。

しかし、簡単に勝てたわけではありません。今回の新潟国体優勝もいろいろとドラマがありました。2007年の秋田国体で優勝し、そこから09年の朝日レガッタまでの間に国内主要全国大会において7大会連続で高校ボートの頂点を極めてきました。（07国体、08選抜・朝日R・インハイ・国体、09選抜・朝日R）しかし、2009年の夏のインハイでは、優勝候補であったにもかかわらずいろいろとトラブルが続きまさかの？4位。その大会は、チーム・個人の悪いところが全て出た大会でした。同時にこのチームが全国大会連戦連勝をひた走る関西エクスプレスを停めてしまったのです。その後、チームのラスト

トレースである国体に向けて短い時間でしたが『捲土重来』をタイトルに練習を重ねてきました。

捲土重来とは・・・一度戦いに敗れた者が更に勢いを増して再び襲いかかってくるという意味ですが、その想いとは裏腹にクルーのチーム力・スピードがなかなか向上しませんでした。時には退化しているのでは？と不安に思ったこともありました。なぜか？それは・・・インハイで4位で惜敗したところであったのです。インハイで負けた時は、皆かなり悔しかったと思いますが、その4位に危険性があったのです。夏に4位だったから・・・頑張ったけど・・・次の国体も同じことありかな？！という逃げ口があったのです。時間が経つにつれて知らない間に心の中に勝手に逃げ口を用意していたのです。高校生のやることです、無理ありません。しかし、「関西高校ボート部員である以上、負

けることは絶対に許されない！次に負けたら終わり。何のための3年間だったのか？！先輩から託されたバトンを何としても次に繋げる！」と選手たちに叩き込み、来るべき新潟国体に向けて『逃げるな！心一つに獲る！！』と考え、死に物狂いで練習を積んでいきました。そうして直前になってかなりチーム力・艇速が向上していきました。選手も私も国体連覇に対して不安から自信、そして確信に変わっていったと思います。

9月23日に新潟入りしてからもクルーは調子を崩すことなく、常に問題意識を持ちつつ、3日間の公式練習でも日々進化を遂げていきました。予選・準決と勝ちあがり、いよいよ迎えた決勝。レース前に私は選手たちにこう言いました。「おめえら、今までよく頑張った。今日は何も指示はない。ただ・・・ここに来たくても来れなかった仲間の顔を思い出して彼らの分まで思いっきり楽しんでこい！」と・・・その時、選手たちは誰の顔を思い出したのか？は知りませんが、皆、ニコッと笑って出艇しました。私は、笑顔で出て行く彼らを見て・・・これはイケる！！と思いました。そして、決勝レースでは、宿敵福井・千葉に一艇身以上の差を付けての完勝でした。選手たちはゴール後、尽きた力を振り絞り、両手を高々と突き上げガッツポーズをし、大声で叫んで喜びを爆発させていました。彼らは自身の目標に対して決して逃げずに、命がけで立ち向かってくれました。本当によく頑張ってくれました。感動的な高校ボートのゴールが待っていました。素晴らしい有終の美を飾ってくれました。そして、2004年から受け継がれている国体優勝という「命のバトン」を後輩達にしっかりと託したのです。

私は、こんな素晴らしい感動を頂いて幸せ者です。選手の皆さん、関西クルーをサポートして下さった皆さん、本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

今年も・・・“We are Achievers in 2009. We are KANZEI.”でした。『思えば叶う。夢実現！』です。

《追伸》新潟で国体6連覇を達成して『日本一』の喜びに浸っていましたが・・・優勝の約1時間後・・・「あ～～～また次が始まった！どうしよう？！俺には・・・終わりはないのか？！」と思ったのも事実です。

あ～～～やっぱり2010年（千葉）も勝ちたい！それは・・・関西ですから！！

